

第9回国際サゴヤシシンポジウム – 人文・社会科学系の発表について –

豊田由貴夫

立教大学観光学部交流文化学科 〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26

今回のシンポジウムでは、人文社会系の発表は例によって少なく、広い意味でそれに該当するのはパプアニューギニアのサゴヤシ澱粉抽出の起源について報告した豊田の発表と、やはりパプアニューギニアにおけるサゴヤシを主食とする地域での病例について報告したGreenhill氏の発表、それにLoreto氏によるフィリピンにおけるサゴヤシ澱粉の伝統的な抽出作業の報告と、サゴヤシ澱粉抽出のための機械の導入に関する報告の4本のみであった。Greenhill氏は本来の専門は微生物学ということであり、またLoreto氏も専門領域は自然科学系であるが、それぞれの発表は広い意味での人文・社会科学系の性格を持ったものであった。

豊田の発表はパプアニューギニアのセピック地域のサゴヤシ澱粉抽出作業について、言語学、文化人類学、考古学の資料から、サゴヤシの利用がこれまで考えられていたよりも新しいという解釈の可能性を示すデータが紹介された。パプアニューギニアのセピック地域での言語学的データによると、セピック地域ではサゴの伝播は海岸から内陸部へという方向が推察される。また考古学的な資料と、サゴヤシが他の作物に比較して儀礼など社会制度に関わる度合いが低いことから、サゴの利用が比較的新しい（地域によっては数百年前）と考えられる可能性について報告があった。ただし実証が難しいこともあり、この問題については今後も検討の余地がある。実際、パプアニューギニアの低湿地では他に食料を得る手段は考えにくいので、サゴの利用が新しいという主張に対しては納得できないという反論もあった。

Greenhill氏は、パプアニューギニアで報告されている「サゴ病」とでもいうべき病例について報告した。パプアニューギニアのサゴを主食

とする地域では消化器系に関連する病気の発生率が高く、時には死亡に至る場合もあるという報告がある。これに関して行われた社会学的な調査では、病気の発生率はサゴ抽出作業地と生活排水場との距離に関連することがわかり、また微生物学的調査では、病気の発生はサゴヤシ澱粉の抽出方法と保存方法に関連するとの報告がされた。

Loreto氏は、フィリピン各地で行われているサゴヤシの伝統的な抽出作業に関する報告をした。随をスライスして澱粉を抽出するなど、他の地域と異なる方法が紹介される一方、サゴを女性がまたいではいけないという風習がパプアニューギニアと同じであるという興味深い指摘もあった。

また、同じくLoreto氏により、フィリピンにおいて澱粉抽出作業を容易にするためにサゴの髓を粉碎する機械を導入した事例が紹介され、その際の工夫、問題点などが報告された。この機械はシンポジウムの最終日のエクスカージョンでも紹介され、実際の利用に関しては多くの質問がなされた。